〔研 究 紹 介〕

沈復『浮生六記』研究

― 夫婦で育む「閑情」 ―

人文科学専攻 文学・文化論コース
修士課程 3 年　　**竇　璐**

作者沈復は、字三白、梅逸公ともいう。長洲(現在の蘇州)の人で、1763 年に生まれた。その著『浮生六記』は 1808 年に完成し、全て 6 巻とされるが、現存するのは４巻である。兪平伯は「この人はもともと商人であり、文学家ではない」と評価している。『浮生六記』は、文学者・作家の作ではないということになるが、滋味溢れる作品で愛読者も多い。

『浮生六記』は沈復が自らのために書いたものであり、はじめから世間に知られることは期待していなかった。最初は沈復の友人たちの間で読まれる程度で、その後行方が分からなくなった。４巻の一部が 70 年後に、楊引傳によって中古本屋の中から発見されて話題になった。文学者・作家の作ではないが、滋味溢れる作品でその後愛読者が増えていった。

妻の芸はごく普通の家庭の出身である。詩文や書画、音楽を学ぶことができるほどの家庭環境に育ったのでもなかった。この小説は『影梅庵憶語』などの影響を受けていると言われるが、『影梅庵憶語』に登場する妻はもと妓女であり、詩文などの教養があるのは当然のことであった。だから、この小説の妻・芸が普通の家庭の出身で、また普通の夫と詩文などを楽しむことは、当時にあっては稀有なことだったと想像される。この小説では詩文等をともに楽しむことを「閑情」と言っているが、夫婦でともに閑情生活を行えたことが、まず世の男性に羨望の眼差しを向けさせることになったに違いない。それではなぜ閑情生活が可能だったのであろうか。そもそも「閑情」とは何か。

『浮生六記』は清朝中期の生活散文の代表として、ある意味で、前世代と後世代の転換の役割を果たしたと考えられる。沈復の蕩蕩の文風と人生観を通し、古代文人の真髄を知り、沈復の創造精神及び独特な風格について知ることができよ

う。

書名は、李白の『春夜宴桃李園序』の「浮生若夢、為歓幾何」からとっている。「浮世」の古い例では『荘子・刻意』に見える。

『浮生六記』の内容は以下のようである。

巻一「閨房記楽」

結婚生活の楽しみを述べる。一方で、不幸の起因、愛妻の死を描いていく。「閨房記楽」にはさほどの大事件はなく、夫婦の生活が淡々と描写される。あえて「事件」として挙げるなら、それは作者が多く筆を費やしているエピソードで、妻が男装して「花照」の祭りを見に行ったり、万年橋のたもとで酒を飲んで楽しんだり、夫のために妾を探してあげたり、ということである。芸は、夫に尽くし、また夫とともに風流の世界に遊ぶ、快活で聡明な女性であった。

巻二「閑情記趣」

子供時代の物の見方から説きはじめ、大人になってからの生活上の情趣を描く。巻二「閑情記趣」と巻四「浪游記快」にはともに「閑情」＝趣味のことがらが書いてある。巻二をなぜ「閨房記楽」の後に配したのかと考えると、これこそ妻芸と築き上げた「閑情」であったからである。巻三の「坎坷記愁」という家庭内の不幸を描いたあとの巻四の「浪游記快」は妻のいない旅での「閑情」ゆえ、おのずから巻二の「閑情」とは意味合いがちがってくる。

巻三「坎坷記愁」

人生の坎坷、運命の不遇、家族の悲惨。夫妻の閑情生活は、「坎坷」によって潰えてしまう。その坎坷とはどのようなものだったのだろうか。この巻は、二人の閑情生活とは直接関係はないが、坎坷の多いなかでの閑情生活がいかに楽しく平和であったかが、逆に理解できよう。坎坷によって閑情生活が懐かしい思い出としてよみがえってくるのだ。

巻四「浪游記快」

名勝旧跡を遊歴し、浪遊したことが描かれる。「浪游記快」の内容は家庭のこまごました心配事もないし、官途の煩悶もない。山水の楽しみを記録するだけで、知己と酒を飲みながら歓談する等が記されている。

巻五「中山記歴」（現存しない）
巻六「養生記道」（現存しない）

清の時代は明代の風紀を継承し、蘇州に生まれた沈復も江南文人特有の気質をもち、「閑情」を重視している。沈復は人ならびに生活における「真」を重んじ、それを追究するあまり、俗世と合うことがなく、生涯流離することになる。が、流離という不遇を支えたのが、妻の芸であり、芸は時には夫沈復の助言者となり、友となり、「閑情」生活をともに過ごした。その二人の生活を描いたのが『浮生六記』であり、現存する四巻の巻一から巻三までは妻との生活が描かれている。特に巻二の「閑情記趣」では、蘇州の庭園、巷間、流水、桂花、石橋、そして「閑情」の代表とも言える詩による交流が描かれている。

「閑情」とは大漢和辞典には「しづかなこころ」とあり、江南文人にとって閑雲野鶴の生活を送ることを言うが、文学作品における「閑情」は辞書の意味で解釈はできない。そこで本研究では、巻二の「閑情記趣」の描写から、「閑情」は沈復と妻芸の愛と生活とによって育まれたものであると考えた。

沈復は家を離れていることが多く、家庭内のことは芸が一人できりもりし、夫がいないなか、不幸を一人で背負っていた。それだけに、沈復が帰ってきたときには、その不幸を忘れて「閑情」に浸ることができた。夫婦で育む「閑情」は、こうして育まれたのである。

〔研 究 紹 介〕

『殷芸小説』研究

― 小説としての虚構創作意識 ―

人文科学専攻 文学・文化論コース
修士課程２年　　陳　若 曦

序論

南朝梁の文人の殷芸が書いた『小説』は初めて「小説」と名付けた書物である。梁の武帝が正史の編集を勅命した際、正史に採用しなかった噂や伝説などを史官の殷芸が整理して収録したものである。したがって、『殷芸小説』は殷芸自身の創作ではなく、四十冊近くの書物から集録して改編したものだ。『殷芸小説』は短い筆記体小説で、志人小説に属するが、志怪小説の内容も含まれている。原書は三十巻あったが、『隋書』の記載では十巻しか残っていない。明代以降は散逸したと考えられる。

「小説」という言葉は、最初に『荘子』の「外物篇」に用いられている。

こまごました言論を飾り立てることで高い名誉を追求するのは、玄妙な大道に比べて遥かに劣る。（飾小説以干県令、其于大達亦遠矣。）

この「小説」とは、道家の「大説」の立場から、儒学者たちが出世のために取るに足らないつまらない話をしてつまらない職を得ようとしている、と批判するものだ。明らかに文学のある特定のジャンルを意味する「小説」と異なる。

なお、今日の小説の必要最低限の条件として「虚構性」を挙げるとしたら、文人はいつから小説を書いたのだろうか。初めて「小説」と名付けた『殷芸小説』は、今日の小説の濫觴とみなし得るのか、また何のために殷芸は「虚構」を用いるのか。その「虚構性」に焦点を当てて研究したい。

「虚構」を用いる外部理由について

１仏教の伝来

魏晋南北朝は仏教と道教の盛んな時期で、仏教道教の「因果応報」「不老不死」という観念が幅広く宣伝された。

２文学自覚の時代

文学は経学の付属的な地位を脱し、他の学術から区別され、独立のジャンルになった。

３民衆の娯楽指向

魏晋南北朝は戦争が頻繁で、飢えと寒さに耐えている人々は生存の希望が見えないので、心の安らぎを望んでいた。

４政治的な圧迫感は魏晋よりそれほど強くない

語林の作者裴启は宰相謝安のことを記録したが、事実に合わないためやつ当たりされた事件は百年前のことで、志人小説を書く文人はありのままの真実にこだわる制限がなかった。

「虚構」を用いる内在原因について

１文人団体の活躍

魏晋南北朝のとき、小説を創作する文人団体はかなり巨大で、曹丕、蕭繹のような王侯将相がいる一方で、葛洪、陶弘景のような道士、さらには祖先冲之、劉暉のような科学者までも小説創作に参加した。

２勉学に励み、多くの本を読み、自身の審美追求がある。

梁書には「性格は洒脱で、小事にこだわらない。勝手に人と交際したり遊んだりせず、門戸には雑客がいない。」と描かれ、殷芸は交友関係において非常に慎重で、見識が高いことが分かる。

３性格は洒脱で、小事にこだわらない

殷芸は従来のしきたりを固く守らない。殷芸小説の内容はもともと他の小説を抜粋したものであるが、古い話を変えたいと望んでいた。

殷芸の虚構創作について

『殷芸小説』の中、虚構の話は二つの種類ある。比較する文がある話と、比較する文がない話である。比較する文がある場合、殷芸は元の物語の真髄を簡潔にした。またはあらたなストーリーを増やした。

①比較する文がある場合

『幽明録』に云う。

漢武帝嘗微行過人家、家有婢国色、帝悦之、因留宿、夜与婢臥。有書生亦家宿、善天文、忽見客星移掩帝座甚逼、書生大惊躍、連呼咄咄、不覚声高。乃見一男子、操刀将欲入戸、聞書生声急、謂為己故、遂蹙縮走、客星応時即退。帝聞其声、异而召聞之、書生具説所見、乃悟曰「此人是婢婿、将欲肆其凶于朕。」乃召羽林、語主人曰「朕、天子也。」于是擒奴伏誅、厚賜書生。

『殷芸小説』に云う。

漢武帝嘗微行、造主人家。家有婢、有国色、帝悦之、因留宿、夜与主卧。有一書生、亦寄宿、善天文、忽見客星将掩帝星甚逼、書生大惊、連呼「咄咄」、不覚声高。乃見一男子、持刀将欲入、聞書生声急、謂為已故、遂蹙縮走去、客星応時而退。<u>如是者数遍。</u>帝聞其声、异而召問之、書生具説所見、帝乃悟曰「此人必婢婿、将欲肆其凶惡于朕。」<u>乃召集期門、</u>羽林、語主人曰「朕天

子也。」于是擒拿問之、服而誅。后、帝嘆曰「斯盖天启書生之心、以扶佑朕躬。」乃厚賜書生。

『殷芸小説』と『幽明録』に書いた話の大筋が大体同じだが、最大の違いは漢武帝が下婢の夫を殺した後の話を増やしたことだ。漢武帝は「これは全部天が書生を啓発したので、私を助けて守ってくれた。」と言い、表面的には書生を称賛しているが、実は天が書生を啓発したから、書生は漢武帝を救ってくれた。つまり天子としての漢武帝の観点は、書生ではなく、自分を救ったのは天だった。歴史上の漢武帝は大きな功績を残しているが、迷信にたより自負が強かった皇帝だ。従って、殷芸が増やした最後の言葉によって、漢武帝の実像が真に迫ってくる。

②比較する文がない場合。

『殷芸小説』の第 44 条に云う。

孔子嘗游于山、使子路取水。逢虎于水所、与共戰、攬尾得之、内懐中、取水還。問孔子曰「上士殺虎如之何？」子曰「上士殺虎持虎頭。」又問曰「中士殺虎如之何？」子曰「中士殺虎持虎耳。」又問「下士殺虎如之何？」子曰「下士殺虎捉虎尾。」子路出尾弃之、因恚孔子曰「夫子知水所有虎、使我取水、是欲死我。」乃懐石盤欲中孔子、又問「上士殺人如之何？」子曰「上士殺人使笔端。」又問曰「中士殺人如之何？」子曰、「中士殺人用舌端。」又問「下士殺人如之何？」子曰「下士殺人懐石盤。」子路出而弃之、于是心服。

この話の中で、単調な理論は機知に富んだ答弁になり、先生と学生の間の危機は孔子によって巧みに解決され、子路の信頼と敬愛を得た。この話は虚構だが、孔子と子路には師弟でも友達でもあるという微妙な関係が史書に残っている。なんといっても、顔回や子貢のような弟子が先生の孔子に殺意を抱くことは想像できないだろう。殷芸はこの話を選んで、史書から源を発して史書より面白く、人物に更に真実な動機と感情を与えることに成功した。

『殷芸小説』第 96 条に云う。

刘楨以失敬罷。文帝曰「卿何以不謹文憲？」答曰「臣誠庸短、亦縁陛下綱目不疏。」文帝出遊、楨見石人、曰「問彼石人、彼服何粗？何時去衛、来游此都？」

この話の前半部分は『世説新語・言語第二』にも書いてあるが、後半部分は殷芸が加えた新たなストーリーである。劉楨は不敬の罪のせいで、死ぬまで朝廷に重用されなかった。この出来事は劉楨にとって痛恨の一事だった。殷芸が追加した後文の内容は、鬱々として志を得られない文人のイメージが生き生きとしていて、読者も物語の最後の詩を通じて劉楨の悲しい気持ちを感じることができる。

本研究は、虚構が明らかであるという話を分析し、殷芸の意図をさぐり、殷芸の「創作」意識と主張を証明してみたい。

〔研 究 紹 介〕

中国文学における「悲秋観」に関する研究

― 宋玉「九辯」における「悲秋観」を中心に ―

人文科学専攻 文学・文化論コース
修士課程 1 年　　肖　夢 茵

「悲秋」文学の起源について

中国文学において、詩人は常に心の悲しみと花や葉が散り落ち、万物が枯れる秋景を合わせ、生命の儚さや生活の困窮を嘆く。「悲秋」という描き方は、最初に先秦時期の詩歌総集『詩経』に現れた。

『詩経 · 小雅 · 四月』:「秋日淒淒、百卉具腓。亂離瘼矣、爰其適歸。」
『詩経 · 秦風 · 蒹葭』:「蒹葭蒼蒼、白露為霜。所謂伊人、在水一方。溯洄從之、道阻且長。溯游從之、宛在水中央。」

しかし、『詩経』では秋の風物を描写した詩編の規模が小さく、「悲秋」の意識はまだ明らかにしなかった。ところが、劉向によって編纂された詩歌総集『楚辞』を境にして、「悲秋」は詩歌で集中的に体現されるようになる。屈原の「離騒」には、「日月忽其不淹兮、春與秋其代序。惟草木之零落兮、恐美人之遲暮。」という「悲秋」意識の詩句が現れた。更に、「湘君」、「湘夫人」、「抽思」、「涉江」、「悲回風」などの詩作は全詩「悲秋」が基調となっている。宋玉の「九辯」は秋を主体として、「燕辭歸」、「蟬無聲」、「蟋蟀宵徵」、「白露下百草」など秋の風物を繊細に描写して、秋景の寂しさを通して、失意の悲しみを表現している。それ故、学界では『楚辞』は「悲秋」文学の起源とされている。

「九辯」の「悲秋」について

「九辯」は、戦国時代の詩人宋玉が創作した長編の叙情詩である。秋に昔のことを思い、自分の悲運を愁嘆し、暗い世の中での痛恨を表している。「九辯」の作風は屈原の「離騒」に似ているが、「悲秋」の主旨がより鮮やかである。

先ず、「九辯」の文頭に「悲哉、秋之為氣也！蕭瑟兮草木搖落而變衰。」という一句は、全詩の「悲秋」の基調を定めた。そして、後文には秋の風物を描写した詩句が多く表れる。このような「悲秋」は「九辯」以前の文学作品では見られない。

また、「九辯」は、多くの象徴的な物を描写する。比喩を使い、自分の境遇を述べ、心の感情を表現する。例えば、「騏驥伏匿而不見兮、鳳皇高飛而不下。」には、「騏驥」と「鳳凰」を通して、高士が低俗な朝廷に屈しないということを表現している。「蟬寂寞而無聲」には、蟬の静寂が描かれ、自分の孤独や憂愁を表現している。

「九辯」の中で、秋は背景ではなく、主体になり、風物の描写は豊かで繊細で、「秋の悲しみを美とする」という美意識が生じ、後人が多くの「悲秋」の作品を生むことになる。唐の杜甫の『秋興八賦』は、秋景の描写を通して、国の現状や将来への憂え、晩年の寂しみを嘆いている。宋の欧陽修の散文作品「秋声賦」は、秋の音を主体として、心の憂さを表現している。元の馬致遠の『天淨沙 秋思』は、「老樹」、「昏鴉」、「枯藤」、「瘦馬」など多くの象徴的な風物を描写した。全て「九辯」の影響を受けた創作と見られる。

日本の江戸時代の漢詩にも、「九辯」と似た「悲秋」詩文が現れた。

龍草廬『秋思』:「獨有飄零客、乍驚搖落秋。」
服部南郭『秋懷二首』:「天際雲飛木葉黄、感時臨眺客悲傷。」
室鳩巣『秋懷』:「嘆息宋玉後、無人解悲秋」。

つまり、「九辯」の「悲秋」の描き方は、後世の文人に受け入れられ、後世の文学創作に深い影響を与えたのである。

先行論文の紹介

尚永亮の『生命在西風中騷動-中國古代文人與自然之秋的雙向考察』（陝西人民教育出版社、1989）には、中国の「悲秋」文学の作者の経歴を収集し、「悲秋」意識と憂患意識の異同を分析し、宋玉の「九辯」は「悲秋」文学を確立したと述べている。

姚曼波の『「九辯」藝術獨特性初探』（文史知識期刊、1981 年 05 期）には、「九辯」の主人公のイメージ、創作方法、言語の特色及び行文の風格など分析し、「九辯」は叙景文学の始まりだと述べている。

川本皓嗣氏の『日本詩歌の伝統―七と五の詩学―』（岩波書店、 1991・11）には、「悲秋」の描写の応用で影響を与えられたのは後世の中国の文学のみならず、

日本の文学も影響を与えられたと述べている。「悲秋」は日本に伝来した後、宋玉の「九辯」の秋景の寂しさと失意の悲しみを合わせる叙情の仕方と同じような詩文がたくさん現れたと述べている。

これ以外、多くの学者が「九辯」の「悲秋」について研究を行ったが、その独自性や後世の文学に対する影響には細かい分析が欠けている。本研究はそれらの先行研究に基づき、更に深く進めていきたいと思う。

進捗状況

研究方法は文献調査を主とする。

1、宋玉の経歴、当時の社会などの資料を探し、宋玉の他の作品を読み、「九辯」の「悲秋」成因を分析する。
2、屈原の「離騒」の「悲秋」と詳細に対比し、異同や特別なポイントを見つける。
3、後世の「悲秋」文学作品を探し、その発展と変化を分析する。
4、研究についての文献、論文等の先行研究を纏め、参考する。

〔研 究 紹 介〕

『列異伝』研究

人文科学専攻 文学・文化論コース
修士課程 1 年　　王 渝 汶

『列異伝』は中国・魏晋時代（3 世紀）の志怪小説集で、全三巻が伝わる。魏の文帝（曹丕）の著書と言われる。『列異伝』は優れた文言小説であり、内容はとても奇妙であると同時に、魏晋初期の典型的な特徴を備えている。たとえば、「宋定伯」という話では、夜、鬼（死者の霊）と出遭ってしまった男が、鬼をだまして捕まえたということが語られる。当時の民間伝承に基づいた記録で、宋定伯の機知と勇敢さを賞賛したものである。このような話は、「人鬼（死者の霊）は実在する」と信じていた魏晋時期の人々にとっては、非常に積極的かつ現実的な意味を持っていた。

修士論文ではこのような『列異伝』について研究しており、課題は二つある。第一に、『列異伝』の作者・編集者の問題である。作者については、『隋書』経籍志によると、『列異伝』は魏文帝曹丕（187-227）の作品であるとする。しかし、『列異伝』には曹丕没後の正始年間（240-249）や甘露年間（256-260）のことも記載されている。そのため、『旧唐書』『新唐書』では、張華（232-300）の作であると訂正したが、証拠は何もない。清朝の姚振宗は「思うに、張華が文帝の続きを記し、後世の人がそれを合編したのであろう〔意張華續文帝書、而後人合之〕」と述べた。この見解により、曹丕没後の話題が『列異伝』に収められているという矛盾を解決したが、これにも確かな証拠はない。

『列異伝』の内容は、南朝劉宋の裴松之（372-451）の『三国志』注釈、後魏酈道元（？-527）の『水経注』に引用されている。そのため、『列異伝』が魏晋時期の人の手になるという説は確かである。現在の『列異伝』や六朝志怪小説に関する研究では、『列異伝』の著者は曹丕とされているが、これは実証されていることではなく、作者・編集者の問題について改めて検討していきたい。

第二としては、『列異伝』が執筆された意図と目的である。『列異伝』の作者とされている曹丕は、皇帝に即位する時、漢王朝の歴代皇帝や新王朝の王莽のように讖緯説を用いることをしなかった。讖緯説は、新たに皇帝となる人物を称賛するために、方士等が自然界に偶然発生した現象を天命の予兆として使用するも

のである。例えば新帝は生まれた時に異色の輝きが現れたとか、あるいはどこかに祥瑞の鳳凰が集まったとかである。呉の孫權も蜀の劉備も、帝位に即く時は讖緯説をとても強調した。漢魏の頃、讖緯説はとても盛んであった。しかし、曹丕は讖緯説を用いることのない現実主義者の側面が強い。鬼神などの話を信じないような曹丕が、『列異伝』を書いたというのである。これには魏晋時代の信仰の問題や宗教、哲学の問題が背景にあると考える。これらを総合的に考察していきたい。

参考文献

・張傳東「《列異傳》對魏晉南北朝誌怪小說集編著的影響」『三峽大學學報（人文社會科學版）』第41巻第4期　2019年7月
・張傳東「魏晉南北朝誌怪小說集的書承性作品來源」『河北師範大學學報（哲學社會科學版）』第42巻第3期　2019年5月
・李春燕「百余年間《列異傳》輯校研究綜述」『天中學刊』第42巻第5期　2019年10月
・蔣勤儉「曹丕撰《列異傳》對文人從事誌怪小說創作的影響」『三峽論壇（三峽文學· 理論版）』2015年6期　2015年
・張曉「魏晉南北朝誌怪中的鬼故事研究--以人鬼為中心的考察」西南大學 中國古代文學　碩士論文　2015年11月

〔研 究 紹 介〕

慶元党禁と道学

人文科学専攻 文学・文化論コース
修士課程 1 年　　李 盈 奇

「慶元の党禁」とは、南宋の慶元年間（1195-1200）に起こった禁令である。北宋の時に程顥・程頤が確立した道学は、南宋の時には朱熹（1130-1200）によって集大成され、後世「朱子学」と呼ばれ、日本や朝鮮・ベトナムなどに大きな影響を与えた。しかし、朱熹が存命中から道学（朱子学）は評価されていたわけではない。むしろ朱熹の晩年は「慶元の党禁」によって弾圧を受けていたのは周知の通りである。

そもそも慶元の党禁以前、「紹熙の内禅」によって、趙汝愚を筆頭とする道学者たちは最も大きな勝者となった。新皇帝の寧宗が即位し、慶元元年（1195）、趙汝愚は枢密使から右丞相となった。国政を取り仕切るようになった趙汝愚は、道学者を大量に抜擢して中央政界に入れて、道学者の筆頭である朱熹に寧宗の講義を任せた。しかし、同じく「紹熙の内禅」で大きな功績を立てた韓侂胄と趙彦逾の二人は、思いどおりにならなかった。韓侂胄は反道学派の人々と団結して、趙汝愚と道学者たちを攻撃した。韓侂胄は皇帝の内批（聖旨）を得て、朝廷にいる道学者たちの官位を剥奪し、自分の支持者を言官（諫官）に任命する。

その後、韓侂胄は「趙汝愚は宗室であり、丞相になることは南宋の社稷にとってよろしくない」と唱えた。この讒言を信じた寧宗は、すぐに趙汝愚の官位を剥奪した上、福州に追放した。趙汝愚の失脚により、後ろ盾を失った道学は「偽学」と定められ、弾圧されるようになる。

さらに道学者に打撃を加えるため、慶元 3 年（1197）12 月、趙汝愚、留正、朱熹など 59 人を「偽学逆党籍」に入れた。慶元 4 年 5 月（1198）、「偽学を禁止する」という詔書を下した。政府は任官・推薦・科挙としては道学者を用いず、学校、学術としては『六経』、『論語』、『孟子』、『中庸』、『大学』の書を禁止した。この事件が「慶元の党禁」と称される。「慶元党禁」は韓侂胄と反道学者たちが勝利したが、嘉泰 2 年（1202）になると、朝廷は「馳学禁」を下し、偽学逆党籍の人の官位を復活させた。開禧 3 年（1207）、韓侂胄は殺され、そのときすでに亡くなっていた趙汝愚や朱熹等には諡が追贈され、名誉は回復された。

修士論文では、道学者同士でやりとりした書簡を資料として、慶元の党禁における道学者たちの動向や考え方を明らかにしていきたい。現在まずは慶元の党禁に関わる重要人物である趙汝愚と朱熹の往復書簡を確認しているところである。

趙汝愚は、北宋の太宗の長男で真宗の同母兄であった趙元佐の末裔である。乾道 2 年（1166）の科挙で状元（第 1 位）となるが、彼が宗室であることから榜眼（第 2 位）に改められた。秘書省正字、集英殿修撰、知福州、吏部尚書などを歴任。四川制置使兼成都知府として四川にいた際には、南宋国境における羌族の攪乱を鎮圧。孝宗から文武の才があると賞賛された。またこの四川にいた時期に、『宋名臣奏議』を編纂。150 巻に及ぶ北宋奏議の選集は、241 人の北宋の大臣による 1630 編の奏議を収録したもので、134 万字に達した。孝宗に進呈すると、高い評価を与えられ、司馬光の『資治通鑑』と比べられた。

行政家としての功績も挙げている。淳熙 9 年（1182）と紹熙元年（1190）、趙汝愚は朝奉郎充集英殿修撰と敷文閣学士中奉大夫の官職により、二回の福州兼福建安撫使に任命された。在任期間中、彼は地元の経済や文化に役立つ多くの仕事をした。例えば、福州西湖を浚い、閩県、侯官、懐安の畑は多大な恩恵に預かった。また、附籍法を発行した。米を与えて人戸に入籍を勧めるもので、在籍人口を拡大させると共に、貧乏な者を米によって救済させていった。

参考文献

・杜文玉「慶元党禁述論」　渭南師専学報　1992 年第 4 期（1992）
・馮会明「定策扶危的宋代宗室宰相趙汝愚」上饒師範学院学報　2006 年第 26 巻第 4 期（2006）
・徐文瑤「慶元党禁之際士大夫官僚的心路歴程」上海師範大学修士学位論文（2013）

〔研 究 紹 介〕

教育学系大学院留学生の修士論文構想

― コロナ禍中のオンライン授業を通して ―

教育学専攻
指導教員　助 川 晃 洋
修士課程１年　張 欣 妍

我が国では、1990 年代以降に政策主導で大学院重点化の対象となった一部の国立研究大学以外の大学の大学院は、制度としては一応存在するものの、恒常的に収容定員を充足することができていないという意味で、「からっぽのショウ・ウィンドウ」[1]と揶揄されてきた。しかし近年の本学大学院人文科学研究科教育学専攻修士課程は、募集枠が埋まるところまでは、残念ながら、まだ到達していないにせよ、内部進学者や他大学出身者、現職教員に加えて、それらの合計より多い人数の外国人留学生が出願・入学してくれたことで、院生のバックグラウンドが多様化し（国公私立の別を問わず、「この傾向は人文系において特に著しい」[2]）、徐々に活況を呈しつつある。2020 年度の助川ゼミ（教育方法学研究室）でも、2019 年度の３名に続き[3]、次の１名をメンバーに迎えることができた。

張欣妍（チョウキンエン）：中国黒竜江省出身、哈爾浜師範大学卒。

そして１年生用主要科目「教育学演習５（教育方法学）Ｉ」（通年、木曜日６限）では、春期を「予備作業」[4]の段階と位置づけ、修士論文のテーマやアウトライン（動機、背景、目的、課題、方法、構成、文献等）をどうするかについて、ほぼ毎週のペースで議論を重ねた。新型コロナウイルス感染症の流行により、学期を通じてキャンパスへの入構が禁止となったため、教室での対面は一切叶わず、インターネットを介した遠隔コミュニケーションに終始することを余儀なくされたものの、Kaede メールや Learning Management System（LMS、学習管理システム）の manaba など、既存のサービスをフル活用しつつ、新たに Zoom を導入して同時双方向性を確保したことで、また２年生になった同国の先輩たちが、自らの経験を踏まえて献身的にサポートしてくれたおかげで、何にも増して本人のひたむきな頑張りと地道な努力によって、当初予定していたよりも先のレベルまで検討が進んだように思われる。

（助川）

＊　＊　＊　＊　＊

張欣妍　幼稚園教員の力量形成に関する日中比較研究
－養成段階での学びが新人教員に与える影響に着目して－

2001 年に OECD が「人生の始まりこそ力強く」（Starting　Strong）と提唱したことなどを契機として、21 世紀に入ってから、乳幼児保育、とりわけ幼稚園教育の重要性が、国際的に、より一層認められるようになった。その担い手である教員には、質の高い保育・教育実践を創造・展開すべく、キャリアの全体を通じて（生涯にわたって）、自ら学び続けることが求められている[5]。

では幼稚園教員は、それ相応の資質・能力、とりわけ実践的指導力を身につけるために、何を、どれほど、いかに学ばなければならないのか。このことに関する定見は、おそらくどこにも存在していない。そもそも各自の置かれているステージが異なる以上、統一的な回答を得ることは難しい。そこで私の研究では、対象を新人（初任）教員のみに限定する。そして彼女ら（女性の比率が圧倒的に高い職種であることから、このように表記した）が、学生時代に、どんな学びを経験しているか。それが、現場で子どもと一緒に遊び、活動する際に、どのように、またどのくらい役立っているか。時代や状況の変化に対応するために、養成カリキュラムを今後どう改善すればよいか。これらについて、日本と中国の両方で該当者にインタビュー調査を行い、データを対照することで、実証的に解明したい。

山崎準二『教師のライフコース研究』創風社、2002 年
山崎準二『教師の発達と力量形成－続・教師のライフコース研究－』創風社、2012 年
山川ひとみ「新人保育者の１年目から２年目への専門性向上の検討－幼稚園での半構造化面接から－」『保育学研究』第 47 巻第１号、日本保育学会、2009 年８月、pp.31-41.
劉海紅・倉持清美・金敬華「日本と中国の子どもの育ちに関する意識－日本と中国の親と保育者の比較から－」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系』第 62 巻第２号、東京学芸大学、2011 年２月、pp.229-240.
爾寛明「中国における幼稚園教育の現状と幼稚園教諭養成について」『桜美林論考　教職研究』第４号、桜美林大学、2019 年３月、pp.23-37.

（張・助川[6]）

＊　＊　＊　＊　＊

大学の教職課程での学習経験が新人教師に及ぼす影響を解明しようとする試みは、認知科学分野における従来の（エキスパート・）ノービス研究の延長線上にあるとみなすことが可能である。単なる偶然の一致に過ぎず、感懐を覚えることでは全くないが、学部を卒業して、およそ半年後に行った不肖私の最初の学会発表もまた、同様に位置づけられるものであった[7]。

ところで 1911（明治 44）年２月に、当時 44 歳だった夏目漱石が、学位制度の持つ権威主義的傾向を嫌って、文学博士号を授与するとの文部省からの申し出を辞退したことは[8]、一種の国事行為に対する造反事件として、あまりによく知られている[9]。しかしこのような気骨の人物の存在は、往古来今、間違いなく例外中の例外であって、通常、特に学問を志す若者にとって学位を取得することは、種類の如何にかかわらず、とても大きな目標であるに違いない。担当の４名には、その達成に向けて、「ゆっくり急げ」（フェスティナ・レンテ、Festina　lente）と自分に言い聞かせながら、日々確実に前進し続けてくれることを期待したい。

（助川）

注

（１）潮木守一「日本における大学院教育と研究組織」バートン・クラーク編著、潮木守一監訳『大学院教育の研究』東信堂、1999 年、p.424.

（２）近田政博「社会人大学院生を対象とする研究方法論の授業実践」『名古屋高等教育研究』第８号、名古屋大学高等教育研究センター、2008 年３月、p.74.

（３）助川晃洋・王頔・陸希・烏達巴拉「教育学系大学院留学生における修士論文作成デザインの端緒－構想の進展とテーマの発見－」『国士舘人文科学論集』創刊号、国士舘大学大学院人文科学研究科、2020 年２月、pp.128-134.

（４）花井等・若松篤『論文の書き方マニュアル　ステップ式リサーチ戦略のすすめ（新版）』有斐閣、2014 年、pp.3-72.

（５）OECD 編著、星三和子・首藤美香子・大和洋子・一見真理子訳『OECD 保育白書　人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較』明石書店、2011 年
OECD 編著、秋田喜代美・阿部真美子・一見真理子・門田理世・北村友人・鈴木正敏・星三和子訳『OECD 保育の質向上白書　人生の始まりこそ力強く：ECEC のツールボックス』明石書店、2019 年
アンドレアス・シュライヒャー著、OECD 編、一見真理子・星三和子訳『デジタル時代に向けた幼児教育・保育　人生初期の学びと育ちを支援する』明石書店、2020 年
国立教育政策研究所編『幼児教育・保育の国際比較　OECD 国際幼児教育・保育従事者調査 2018 報告書　質の高い幼児教育・保育に向けて』明石書店、2020 年

（６）張が作成した草稿に、助川が加除修正を施し、体裁を整えた。

（７）長谷川栄・佐々木俊介・新井孝喜・樋口直宏・助川晃洋「授業中の予想外場面における教師の判断－国語の授業を事例として－」日本教育方法学会第 28 回大会自由研究９－⑤、1992 年 10 月４日、奈良教育大学
（８）磯田光一編『漱石文芸論集』岩波書店、1986 年
三好行雄編『漱石文明論集』岩波書店、1986 年
三好行雄編『漱石書簡集』岩波書店、1990 年
（９）小宮豊隆『夏目漱石』岩波書店、1938 年
福原麟太郎『夏目漱石』荒竹出版、1973 年
江藤淳『漱石とその時代（第４部）』新潮社、1996 年
小山慶太『漱石とあたたかな科学　文豪のサイエンス・アイ』講談社、1998 年